

月例研究会（2008年10月22日）

## 「一斉授業」における 相互行為の構造

——「働くことの意味を考える」授業を通して

江頭 説子

### 本報告の目的

本報告の目的は2つある。まず、「一斉授業」における相互行為の構造をあきらかにすることである。相互行為を構成する要素のなかでも、今回はリアクション・ペーパー（以下RPと略す）と称する紙面上のやりとりに焦点をあてる。つぎに、RPを介した相互行為により、受講者がどのように「働くことの意味を考えていくか」そのプロセスについてあきらかにしていくことである。

### 報告内容

前半は分析の方法論、理論的な枠組みを見出すための先行研究について、後半は報告者が担当している授業の実践にもとづいた事例研究の報告をおこなった。紙を媒介とした学生とのやりとりは目新しいものではない。研究の事例として「大福帳」、「ミニツペーパー」、「何でも帳」等がある。なかでも「何でも帳」は、1996年度に京都大学高等教育教授システム開発センターが主催した、研究を目的とした公開実験授業で導入され、授業者だけでなく観察者による分析もなされている。そこで「何でも帳」について焦点をあてた検討をおこなった。その結果、

授業は構造化されており、構造化のプロセスをあきらかにするためには、方法論としての相互行為分析が有用であること。授業の相互行為を考察していくうえで、紙をベースにしたやりとりの道具である「何でも帳」は重要な役割もっていることがあきらかとなった。

先行研究であきらかとなった知見をもとに、「RPの機能」、「働くことの意味を考える」プロセスについて、それぞれ遭遇期・模索期・確立期の3つの段階にわけ、相互行為分析をおこなった。得られた知見は以下の通りとなる。「一斉授業」における相互行為は、授業者と受講者、受講者と受講者に2方向で成立する。RPには、「書く行為」による自己理解と、「読む行為」による他者理解を助ける機能があり、なかでも「読む行為」が相互行為の再帰性と循環性の2つの機能へつながっていくことがあきらかとなった。「働くことの意味を考える」プロセスにおいてRPのもつ「読む行為」は、受講者自身がそれまで培ってきた知や経験にたいする視野の広がりをもたせる機能を持ち、自身の経験を客観的にみつめ思考を深めるといふ、意識的な再構造化を試みる「自覚的構造化」を促していることがあきらかとなった。

今後の課題として、「経験」をいかにして「思考」につなげていくかの方法論についての検討があげられる。なぜなら、「働くことの意味を考える」RPの内容分析より、「経験」という概念が重要な役割を果たしていることが浮き彫りになったからである。

（えとう・せつこ 法政大学大原社会問題研究所兼任  
研究員）